柿生文化

柿生郷土史料館　情報・研究誌
住所:川崎市麻生区上麻生 6-40-1
柿生中学校内
電話:070-1503-6401、044-988-0004
http://web-asao.jp/hp2/k-kyoudo
第99号

外国人が知っていた「日本」とは(5)　近・現代（最終回）

===近・現代、欧米人の日本人観の原点を探る===

明治時代の日本はどのように海外に紹介されていたのでしょうか。明治3年、横浜で発刊された英字新聞ファー・イーストは写真で幕末から明治初年までの日本人の生活を紹介しました。欧米諸国では、神秘に満ちた東洋の小国日本の姿が驚異の眼差しで見つめられました。（写真1=日本人の挨拶=幕末～明治初年撮影）

（写真 1)日本人の挨拶

明治期、日本に滞在した多くの外国人が日本に魅了されました。イギリスの言語学者チェンバレンは長所として「清潔さ」「親切さ」「洗練された芸術的趣味」、短所として「国家的虚栄心」「非能率的習性」と、これは日本人の行動様式が「型」から入ることが多く、その非合理性を指摘したのではないかと思われます。イギリスの女性旅行家のイザベラ=バードは、18歳の日本人、伊藤鶴吉をガイドに東北地方・北海道を馬で旅をしています。当時、まだ文明開化の恩恵に浴していない北日本を回ったのは「本当の日本の姿」を見たいという願いからでした。彼女は当時の庶民が、貧しくても清潔で善良であること、外国人女性の旅であっても無礼や侮辱にあったことが一度も無かったことに驚いています。

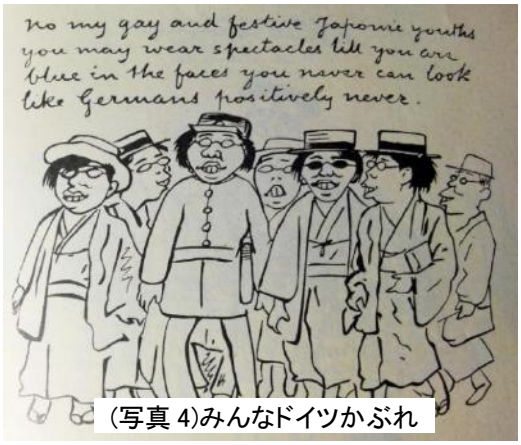
（写真 2)真夏の海岸で

このような多くの外国人の日本に対する印象に対して、明治22年来日したポルトガルの外交官モラエスは欧米化=近代化を急ぐ日本人に対して「もしおまえがそんなに身にあわない山高帽や靴を使わず、機関車がおまえの野山をひっかかなかったとすれば、多分もっと幸福であったものを」と記して、こよなく愛し続けた美しい日本の姿が変わってしまった事を嘆いています。

このような感情は、明治25年に来日したフランスの画家ビゴーに近代化を目指す日本の姿に対して辛辣な風刺画を書かせました。

（写真 3)場所は鹿鳴館?

（写真2）は、明治29年頃静岡県沼津市郊外の漁村で目にした光景で、洋傘を手にワイシャツ・靴下・洋靴・麦藁帽といった洋装ずくめの青年があまりの暑さにズボンを脱ぎフンドシ姿で意気揚々と歩いている姿をスケッチしたものです。（写真3）は社交界に出入りする紳士淑女と題されています。何と鏡に写し出された顔は猿ではないですか。嘗て日本人は「黄色い猿」と侮蔑された事がありました。（写真4）はイギリスのジャーナリスト、ワーグマンが描いた帽子とメガネで気取った日本の青年たちです。ほとんどの青年が出っ歯であることも気になります。上のキャプションには「陽気でお祭り気分の日本の若者達よ。いくら顔が青くなるほどメガネをかけてもドイツ人には見えないよ。絶対に」と記しドイツ指向の世相を風刺しています。これらの風刺画は西洋から見た日本の未開性を伝えただけでなく日本が無理に西洋化しようとした事への痛烈な批判でもありました。最後に（写真5・6）を見てください。時代は約100年以上過ぎた平成に撮影されたフランス、パリ郊外のシュレーヌ市のお祭り風景です。祭りのテーマが「日本」でした。周辺地域からアジア系の人を集め日本のイメージで仮装したそうです。皆さんどうお感じになりますか？　欧米諸国の日本のイメージは未だに時代錯誤の旧態依然としたものが意識の中に残っているようです。



（写真 4)みんなドイツかぶれ

（写真 5)日本人は皆入れ墨をする?

（写真 6)日本文化?大きな扇と編み笠

明治期、来日した欧米人の多くは日本の素晴らしさを体験していました。しかし、日本の近代化が単に西洋の模倣であることに違和感を強く感じていたのです。そのような中で本来の日本文化が十分に伝えられず、不思議で未開な部分だけがクローズアップされたまま今日に引き継がれてきたようです。残念なことです。

（参考資料:「ファーイースト写真集」「日本事物誌」「ビゴー　日本素描集」「日本奥地紀行」他）　（文:板倉敏郎）

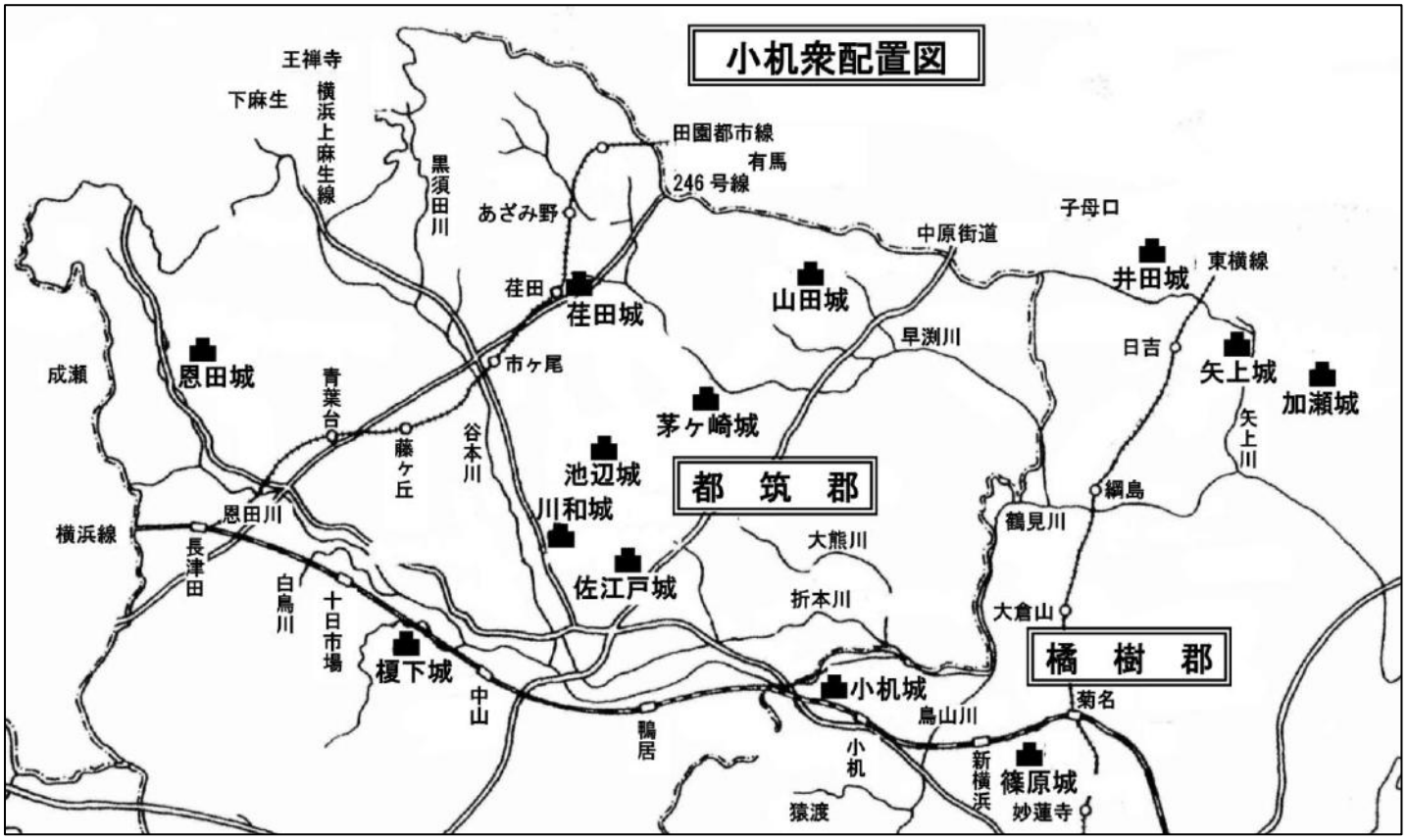
シリーズ
「麻生の歴史を探る」　第 69話

北条氏関東支配（2）～小机支城

小島　一也（遺稿）

小机というと今は新横浜で、何か遠い感じがしますが、私の子供の頃は同じ都筑郡下鶴見川に沿って一本道（現横浜上麻生線）。現横浜アリーナ辺りの田圃にアメリカ渡来のざりがに（海老蟹）が繁殖、これを捕りに遊びに行ったものです。城の在る所は鶴見川の本流が小机の丘陵に阻まれて大きく北へ湾曲する場所で、高さ約40m の断崖、二つの山塊が並び立つ天然の地形で、城下には渡船場があったといい、陸路に加え舟行きの便もある要地で、鎌倉時代、この地の豪族小机昌安と呼ぶ御家人が館を構えたのがその始まりと言われています。

小机城を中心とする支城の配置を見ると（下図小机衆配置図参照）、その多くは鶴見川本支流を防衛に利用構築されており、小机城の東、わずか１Kmに篠原城、矢上川には加瀬、矢上城。その上流に伊田、有馬城。早渕川には大曾根、山田、茅ケ崎、荏田城。本流沿いには佐江戸、川和、池辺城。恩田川には榎木（久保）、成瀬城などで、これらの城の特徴は小規模ながら、相互の距離は平均2～3Km、いずれも要害の地を占め、交通の便もよく、小机城を守る支城の配分がよくなされています。



それではこれらの城の構築はいつ頃で、その城将は誰だったのでしょうか。調べてみると多くの城の歴史は鎌倉時代からで、この地に進出した北条氏（早雲、氏綱）は、土地の豪族を大切に扱っております。そのいくつかを拾ってみると、「篠原城」は金子出雲守と呼ぶ土豪の館で、金子氏は小机衆となり、その子孫は現在の金子家（はま屋）と言われます。「矢上城」を新編武蔵風土記稿（以下、風土記）で見ると、矢上村旧跡館跡の欄に「保福寺を建立せし中田加賀守の住せしところ」とあり、中田氏は土地の土豪に間違いなく、また「加瀬城」は太田道灌の逸話通り上杉氏によって小城が築かれていたのではないでしょうか。「佐江戸城」は現中原街道に面する広大な城郭で大永年間（1520年代、氏綱時代）猿渡内頭守が築いたとされ、風土記によると、この人は土豪猿渡佐渡守の一族と記し、土地の豪族が小机衆となったことを示しております。「茅ヶ崎城」も風土記には「多田山城守行綱が館蹟なりと云い伝う」と記してあり、大永四年（1524）氏綱が改造したと伝承されていますが、この城跡は港北ニュータウンに含まれ、開発者によって城の機構が復元され、ガイド板が設けられ、中世の城郭を知る貴重な城跡公園となっています（センター南下車東10分）。

（以下4ページへ続く）

茅ヶ崎城址公園

シリーズ
時間と時計の話 第2部

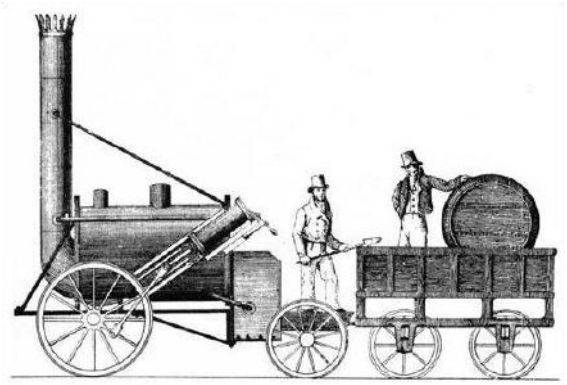
時計と時間の観念（5）

小林　基男（柿生郷土史料館専門委員）

◆標準時の誕生◆

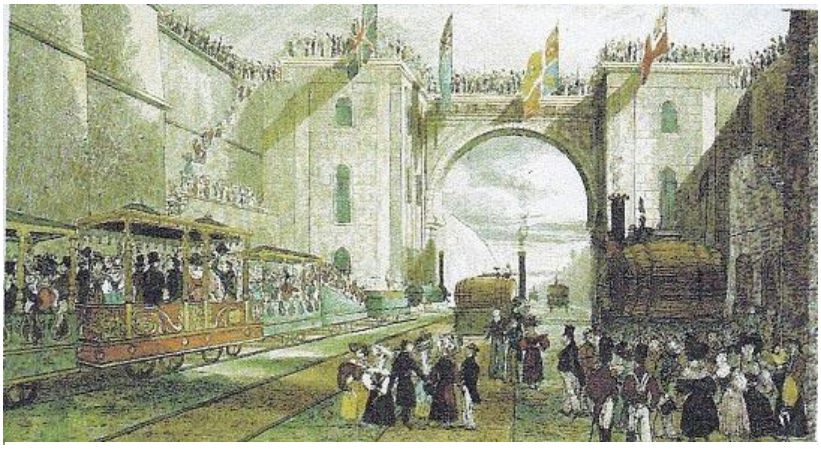
困った問題とは何でしょうか。現在の日本の鉄道ほどに正確でなくとも、列車は決められた時間の通りに走ります。しかも現在のように、1時間に何本もの列車が走るわけではありません。せいぜい日に数本です。時間通りに駅にいかないと、列車は待っていてくれませんから、乗り遅れてしまうのです。

今は何時か？　それを知るには、正確に時を刻む質の良い懐中時計を持ち歩くのが、最も確実でした。こうして懐中時計は、鉄道を利用する人々にとって、なくてはならないものになったのです。



スチブンソン製作の「ロケット号」

オランダとイギリスに生まれ、すぐにスイスやフランスにも伝わった懐中時計の技術は、瞬く間に精巧な狂いの少ない時計を生み出し、富裕な人々ばかりではなく、中産階級に属する人々へも広まり、大きな流行を生み出しました。しかし、列車の運行は、懐中時計を持つだけでは解決にならない厄介な問題を含んでいたのです。夫々の地域が、夫々の地での太陽の南中時を正午としていたからです。地域に依って、時計の示す時間が違っていたのです。鉄道が登場する前の駅馬車の時代では、時間もかなりアバウトでしたし、馬の付け替えや休息の時間も必要でしたから、時刻の違いはそう深刻な問題にはならなかったのです。ところが、現在ほどではないにしても、鉄道列車は決められた時間に出発し、決められたスピードで鉄路を走りますから、決められた時間通りに次の停車駅に到着し、そして出発してゆきます。ここに問題がありました。



マンチェスター・リヴァプール間の旅客鉄道の開通式（1830 年）

どの地域も、その土地での太陽の南中時を正午とし、時計の針を合わせていたのです。生活圏が違いますから、地域によって異なる時間が使われていても、何の問題もなかったのです。しかし、鉄道の時間は始発駅の発車時間が基準になります。今A駅とB駅の距離を列車で西方へ1時間とすると、A駅を午前 9 時に出発した列車は、B駅には午前 10 時に到着し、10 時 05 分にC駅に向けて発車することになります。この時間はA駅の標準時に合わせた時計の時間です。A駅とB駅で南中時が 20 分違っていたとすると、B駅の標準時に合っている時計の持ち主にとっては、まだ 10 時にもならない 9 時 45 分に列車は発車してしまうことになります。自分は発車時間に間に合うように来たのに、列車は既に出発していたという不都合が生じるのです。運転士の時計と各地の住民の時計が、夫々の標準時に合わせているために、異なる時刻を指しているからです。

これは何とかしなければなりません。困った鉄道会社は、大都市の始発駅の時刻表と、地域時間を示すローカルな時刻表の双方を運転士に持たせ、ある所から先へ行ったら、こちらのローカルな時刻表を使えといった、複雑な指示を出したのです。この指示には運転士が混乱してしまい、大失敗に終わってしまいました。こうした混乱の中から生まれたのが、全国標準時の構想でした。こうしてフランスではパリ天文台の南中時を正午と定め、イギリスではグリニッヂ天文台の南中時を正午と定め、夫々全国の時刻を統一したのです。オランダ、スイス、プロイセンなども、同じように標準時を定めたのです。

◆標準時の普及◆

全国標準時の誕生は、鉄道が普及したためでした。しかし当時の鉄道は、現在のように日常的に使われるものではありませんでした。もちろん通勤や通学の足になるのは、ずっと後のことです。当時の人々にとって、鉄道は商用とレジャーのための乗り物でした。鉄道を利用できる人々、標準時に合わせた懐中時計を身につけた人々も限られていました。時間の観念を普及させ、時計の示す時間の利用を広めたのは、前号で記した工場制度の普及による資本家と労働者の労働時間をめぐる約束にありました。

工場経営者である資本家は、工場を建てて機械を据え付け、原料や動力まで用意した上で、自らの労働力を提供することで賃金を得ようとする労働者を雇って、原料を商品に加工させます。その商品を売って利益を確保するためです。ここでは労働者たちは、朝A時から夜B時まで働いて 1 日 100 円、それが 1 週間続いて 600 円というように、週給契約で雇われるのが常でした。A時には工場で作業を開始しなければならない。これが資本家と労働者の契約の基本でした。終業時間は問題ないのですが、始業の時間を守るのは大変でした。労働者の前身は手工業者か農民です。時間を意識して労働する習慣など持たない人たちばかりでしたから、尚更でした。　（続）

（2 ページから続く）

「荏田城」は旧鎌倉街道中の道にあり、義経の臣江田源三の城から、中世都筑の御家人の根拠地とされた城で、交通の要所で小田原北条時代改造されたと思われますが、城将はわからず、城跡は在家地主（5名）によって現在も自然保護されています。なお、市ヶ尾には氏康から所領を得た上原出羽守、青砥（中山）にも領主（北条家臣）勝部正信の後裔が今に残り、恩田川の「榎下城（久保）」は旧城寺境内の小城で、境内の石碑に「山田右京之進城跡」とありますが、山田氏については不明で、此処には文明年間（1469～87）上杉一族の館が在ったと伝承されており、北条氏に押収されていったのでしょう。

榎下城址案内板（旧城寺境内）

旧城寺本堂

川崎市域の宮前区「有馬城」は、古来この地を城山と呼び、土豪持田氏の屋敷跡で、後に北条桶の臣窪田又五郎なる者が屋敷を城塁に改造したといわれ、「井田城」（現中原養護学校）は、これも北条家の臣中田加賀守が旧蹟を修復して居城とした、と風土記は述べています。

参考文献:「横浜市史」「青葉のあゆみ」「鶴見川沿い歴史散歩」「新編武蔵風土記稿」

柿生郷土史料館催物案内　【入場無料】

◎開館日:偶数月は毎土曜日、奇数月は毎日曜日　（原則として月4回）

8月　6・20・27 日（毎土曜日）　**9月**　4・11・18・25 日（毎日曜日）

◎開館時間:午前10時～午後3時　（8 月 13 日は休館です）

募集

柿生郷土史料館友の会　第 5 回史跡見学バスの旅

久能山東照宮周辺の史跡巡り

日　時　2016 年 9 月 27 日（火）

主な見学先　久能山東照宮と博物館、由比の街並み、登呂遺跡

集　　合　：　7時 45 分　　新百合丘駅北口　（21ビル前の歩道）
解　　散　：　午後 7 時 00 分頃　（新百合丘駅北口　→　柿生駅付近）
募　　集　：　44 名（ 先着順　定員になり次第締め切ります）
費　　用　：　9500 円
申し込み　：　往復はがきに必要事項を記入の上、柿生郷土史料館まで
必要事項　：　参加者全員の郵便番号、住所、氏名、年齢、連絡先電話番号
送付先　　：　215-0021　川崎市麻生区上麻生 6-40-1
　　柿生中学校内　柿生郷土史料館
　　（お近くの史料館支援委員にお渡しいただいても結構です）

申込締切　9 月 5 日（月）
問合せ先　：　小林基男　（080-5513-5154 または 044-989-0622）

ついに完成！
ふるさと柿生の記憶を DVD 化
第1弾

「身近にあった信仰の世界と人々の思い」
◆◆◆晩秋の上麻生「秋葉講」を訪ねて◆◆◆

ご希望の方にはおわけしております。詳しくは史料館までお問い合わせください。